南平和夫さん追悼句

身に入むや未だ壮かりし詩友逝き　万里子
鉄道の句なき淋しさ秋句会　天牛
積年の努力尊し星流る　恭延
秋桜小さな介護に謝辞あふる　眞希子
菊の香や天に昇りてとこしえに　ゆたか
三十年病（やまい）身に添ひ秋に逝く　猛
秋の浜夕日の落ちる早さかな　正明
タイマーの音の後追ふ虫の声　仝
結論を先送りせし曼珠沙華　仝
和を以って南風湧かせし平坦さ　龍平
病みてなお南風絶やさぬ不退転　仝
今頃は何処の旅の空にかな　允章
真円に疲れし今も寝待月　青史
今頃は銀河巡りの列車かな　規雄
穏やかな鉄道好きや星流る　仝

闘病三十年看取りし妻の秋彼岸　紀久男
白菊や「時刻表」入る友の棺　仝
懸命に生き「時刻表」を手に菊の棺　仝
流れ星悼みは長き尾を曳きて　孤舟
霧深しグッバイ笑みの南平さん　堂哉
鰯雲吾のワイシャツ誉めし人　仝
鉄路延ぶ白く刷かれし秋の空　五郎太
逝きし友みごとな月を残しけり　そらお
秋櫻電車の窓に和夫さん　隆
鉄道の句を詠む友は秋旅路　忠彦
満月へ二日を待たず逝きにけり　弘子
銀漢へ別れがたなの汽車送る　仝
仲秋は句友偲ばむそれぞれに　亜也
汽車の跡遠き旅路へ友の逝く　河原四郎
亡き人によく頑張ったと頭下げ　仝
名月や精魂こめて生きぬいて　鈴木圭介

南平和夫さん遺句五十一句

年代順・紀久男抄出

大瀬戸や釣り船東風のなすがまま
白鷺や嵐気貫く急降下
谷戸の奥一軒だけの田植かな
夏の雲市電追ひかけ城下町
終点は彼岸花咲く無人駅
降りてみる冬蒲公英の無人駅
紫陽花やスキッチバックで再会す
風船のねぢり鉢巻き肩車
新緑に埋もれゆく駅悲別（上砂川駅）
廃線の日まで幾日ぞ彼岸花
桟敷席マフラー佳人も大笑ひ

―「二百回記念句集」（平成十五年）―

着飾りて少し太めの孫成人
氷海と大地を分ける鉄路かな
隧道を出るや眼下に鯉幟
就活や若者走る師走かな
冬寒や震災後の思ひやり
歓声に応へる汽笛初山河
望郷や気動車の行く麦の秋
宇宙とは何かと問はれし星月夜
雪深き金木町に行き倦み
ゆるゆると春の大川越す電車
若鮎や友の釣果に美酒もあり
小春日や模型で偲ぶ汽車世代
底冷やおむすび分け合ふ老夫婦
汐留の高層ビル街名残の月

―「三百回記念句集」（平成二十三年）―

彼岸桜廃車一輌朽ち果てて
日焼けせる孫初めての浴衣着る
小春日や海豚の飛びて孫の跳ね
山焼きの煙棚引く久留里線
凍れる夜ベッドのパイプ冷えに冷え
春空に見ゆ父の顔母の顔
のったりと黒鯛一匹釣り上ぐる
初霜や選挙終りし静けさに
病室の実感わかぬ金婚式
戻り梅雨新幹線の軌条錆
鯉幟風に吹かれて尻尾巻く
行水も居間にて介護さるる日々
祇園会の京友禅を競ひ合ひ
東風吹けば踏切の音カンカンと
パレードの春多士多彩の歌舞伎かな
隣家から児らの雄叫び空っ風
待ちわびる春の日替り介護食
雪の日に色とりどりの医療する
早いねと妻持ち帰る山桜
吾妻山咲きて菜の花あふれさう
鰭酒に口もこころも滑りさう
春の雲空の真ん中悠然と
花に酔ひ絆確かな従兄弟会
千両に万両加へ活けにけり
春昼この金環触見しラッキーボーイ
田植毎里山緑深まれる

〔略歴〕１９６０年（昭和三十五年）神戸大学経済学部卒→丸紅飯田繊維製品部（大阪）入社
→ラングーン（現ヤンゴン）駐在→海外業務部（東京）→人事部
２０１３年（平成二十五年）九月十七日御逝去　享年七十六歳